

平成二十三年度 入学試験問題

国語

(第一回)

注意

- 一、問題用紙と解答用紙が配られたら、まず**解答用紙の決められたところに受験番号、氏名**を書いてください。
- 二、試験開始の合図があるまで、表紙を開けないでください。
- 三、試験開始の合図があったら、問題のページ数を確かめてから始めてください。
- 四、この試験は、**十ページ**あります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげてください。
- 五、印刷のはっきりしていないところがあったら、だまって手をあげてください。
- 六、試験終了の合図があったら、すぐに鉛筆を置いてください。
- 七、その後、解答用紙を集めますので、解答用紙を机の上に、表を上にして置いてください。
(問題用紙は持ち帰ってかまいません。)
- 八、国語の試験時間は**五十分**間です。(九時四十分を終了予定です。)

① 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点も字数に入れることとする)

「足跡」と書いてアシアトと読めば、廊下の濡れた足形や、犯罪の捜査活動に使う靴跡のように、イメージは具体的である。しかしソクセキと読むと、がぜん言葉が深い広がりをもってくる。人生、文化、民族とスケールも大きくなる。ぬかるんだ地面に偶然ついた足跡を「これが私のソクセキだ」などということはない。

一九六九年、月面に残した自分のアシアトを「人類にとって大きな飛躍」といった宇宙飛行士の言葉が、私には白けて聞こえてしまったのは、そのせいかもしれない。アシアトをソクセキに手前勝手に格上げされては困るのだ。①それは歴史の判断に任せるべきだった。

そんなことを考えたのは、まさにソクセキといえるアシアトに出会ったからだ。三六〇万年前に残された人類の足跡である。人類学者、真家生さんの研究室には、タンザニア北部のラエトリで発見された、アウストラロピテクス・アファレンシスという初期人類の足跡が保存されている。

レプリカだが、地表からそっくり引きはがしたように精巧にできている。地面をかたどったボードの上には、十個ほどの足形が四筋になって点々となっていた。現地で発見された足跡は全部で五四。これはその一部だ。

一九七八年の大発見はI人類学の論争に終止符を打った。この人類にはチンパンジーと同じ大きさのaノウシかない。顔かたちは私たちよりもチンパンジーに近い。そんな彼ら

がなんと立って歩いていたのだ。猿よりもノウが大きくなり、重い頭部を支えるために立ち上がった動物が人類、という説は完全にくつがえされたのである。

しかしこの足跡は、IIあらたな論争を生んでいる。当初、それは大柄な人類とそれより小さな人類、二人の足跡だと見られていた。大柄といっても足跡から推測するに一五〇センチほどで、小柄なほうは一二〇センチ程度である。初期の想像図は、先頭に行く男の少し後を赤ん坊を抱えた女が歩いているというものだった。

ところが、くわしく観察するとそれは三人であることがわかってきた。大柄なほうの足跡のなかに、もうひとつ別の小さな足跡が見つかったのだ。こちらは推定一四〇センチほど。前に行くヒトの足跡をなぞりながら歩くという行動は人間的であり、猿ではない。つまり、それぞれ身長異なる三人がいっしょに歩いていたということになる。

彼らはどんなグループだったのか？ さまざまな説がある。あなたはどうか推理するだろうか。

近くに噴火する火山があった。地面はぬかるんだ火山灰で覆われていた。スコールがやんだばかりで、地表には雨粒の跡も残っている。そこに通りかかったのが三人である。彼らを通り過ぎた一、二時間あとに大きな噴火がおこり、新しい灰が彼らの足跡を三六〇万年間保存することになる。

A このグループが、家族であつたらうと推測するのが妥当である。

二足歩行する人類は、骨盤の形が四足歩行の動物より出産に不向きになる。B 他の動物より胎児がbミジユクなうちに産み落とし、つきつきり長い間育てなくてはならない。それには育児、狩りという分業が必要で、現代のような核家族に近いものをcケイセ

イすることになる。

三人が家族とすれば話は早い。先頭を父親、そして少し後を母親、C 子供が父親の足跡をなぞりながら後につく。これでおさまりがつく。

D ② 真家さんは独特な見方をする。同時期にヌーに似た動物のdタイグンが通った足跡も前方に発見されている。父親は狩りが使命だ。先に獲物を追いかけて三人の家族をおいていったのではないか。

とすると、残されたのは母親と二人の子供。彼らの足跡ではないかというのだ。さらに二組の足跡の歩幅は同じである。彼らは歩調を合わせて歩いた。身長とその歩幅から類推すると急ぎ足である。しかも二組の足跡の間は狭い。右側の人物の左足と左側の人物の右足のeカンカクは一〇、二〇センチたらずしかないのだ。きっと母親は、わが子を抱きしめるようにくつつきあって進んでいたにちがいない。そして、後方を上の子が母親の足跡をなぞりながら進む。むろん証拠立てるものはない。答えは永遠に出ないだろう。

しかし私は、この説を耳にしたとき（X）ものがあつた。火山はふたたび今にも噴火しそうな勢いである。もくもくと煙を吹き上げていただろう。しかも見晴しのいい平原は危険地帯だ。凶暴な肉食獣もいたにちがいない。自然は彼らにとって脅威そのものだった。

三六〇万年前の平原を、おそろおそろ行くこの三人を結びつけていた感情は、ひとこといえばおびえではなかったか。彼らは身を寄せ合いながら生き抜いていくほかなかった。いつなんどき災害に、肉食獣に、病に倒れるか分からなかったのだ。

昨今、家族のもろさが指摘されるが、その一因には（Y）の喪失があるのかもしれない。

ない、と私は思う。（Y）が個々人の内部にとどまり、家族として共有されなくなったとき、そのきずなはもろい。はたしてラエトリの家族は、その後どう生きのびたのだろうか？

（藤原智美 『三人の人類』）

（設問の都合により、一部語句を改変しています）

問一 二重傍線部aとeのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「それ」とは何を指すか。三十字以内で答えなさい。

問三 空欄AとDにあてはまる語をそれぞれ次のア～カから一つずつ選びなさい。

ア さらに イ よつて ウ たとえば
エ しかし オ もしくは カ ます

問四 傍線部②「真家さんは独特な見方をする」とあるが、どのような見方か。三十字以内で答えなさい。

問五 太線部I「人類学の論争」、II「あらたな論争」とあるが、それぞれどのような論争か。簡潔に説明しなさい。

問六 空欄（X）にあてはまる慣用句を次のア～オから一つ選びなさい。

ア 腹がすわる イ 腑に落ちる ウ 胸にせまる
エ 心がはずむ オ 肝を冷やす

問七 空欄（Y）にあてはまる語を、本文中から抜き出しなさい。

②次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点も字数に入れることとする)

「勘弁ならぬというのと、どうするんだ」

「このまま生きてはおられません。重助を討ち果すか、それともこちらが討たれるか、どつちかに形をつけなければ、私の面目が、どうしてもたため場合なのです」

「つまり果合いをするというのだな」

上森又十郎は初めて甥の顔を見た。

「できるだけ、堪忍したうえのことです。これ以上は臆病者の誹りを受けます」美しく紅潮した少年の面には、鑿で彫りつけたような決意の表情があらわれていた。

少年の名は大六という。上森又十郎には兄にあたる池野五郎右衛門の一人っ子で、そのとき十五歳になり、小姓組にあがっていた。背丈も二歳ぐらい年上に見えるし、頭も明敏で、仲間うちでもかなり幅を利かしていたようである。相手の石河重助というのは*1物頭の子からだつきは小がらであるが、むやみに敏捷な、ちよっかいの早い、乱暴者として名が通っていた。喧嘩の原因はまったく些細なものだが、「どうしても果合いをする」と云う大六のaタイドはbシンケンだった。

「①侍の命は、いちど御主君に捧げたものだ、それを*2御馬前のお役にたてないで、私事のために捨てるというのは、道にはずれているだろう、私にはどうしても賛成できないな」
「けれども、いちぶん相立ちがたきときは、その場を去らず、いさぎよく勝負して存念を
はらすがよし、と御家訓にもはつきり示されております」

「それだからといって、道にはずれたことが正当になるわけではないぞ」

「②それなら、もうお願いしません」

そう云って大六は立ちあがった。そのまま行ってしまいそうにするので、又十郎はまあ待てと、袖を捉えんばかりにひき留めた。

「これだけ申ししても、思い止まれないというならしかたがない、厳秘のことだが、おまえにだけうちあけてやろう」又十郎は坐り直して、声をひそめながら、じつと甥の目を見た、

「……じつはここ半年か一年のうちに戦が起りそうなのだ」

「ええつ、戦が起りそうですつて」

「半年か一年のうちだ、それ以上のことはなにも話せない」又十郎は膝を進めた、「……いま喧嘩で捨てる命を一年延ばして、御馬前のお役にたてる気はないか、大六、それでもやはり重助と果合いをするほうがいいか」

「果合いはやめます」大六はcソクザにそう答えた、「けれど、戦が起るといのはほんとうでしようね、叔父上、ほんとうならもう問題はありませぬ、これからいつて重助と仲直りをして来ます」

「仲直りをするには、おまえが謝らなければなるまい」

「謝るくらいなんでもありません」

大六は、*3凜然とそう云って、重助のところへでかけた。向こうでは岩橋なにがしという侍を介添に頼んで、約束の場所へでかけようとしていた。和解しようという大六の申し出が、③嘲笑されたのは云うまでもない。重助とその仲間はあらゆる方法で辱めたり、嗤ったりした、「地面へ坐って、両手について謝れ」と云った。大六はそのとおりにした。

いくらでも笑うがいい、いまに戦になったらおれのほんとうのねうちを見せてやるぞ。そう思いながら、齒をくいしばって我慢しておした。

この話はたちまち城中へひろまった。大六の評判はよくなかった。

「少年同士でも、いったん果合いの約束までしたのなら、いさぎよく勝負をすべきである、土下座までして約束をとり消すというのはむしろ臆病と云わなければなるまい」

そういう評が多かった。④けれども大六は、どんな評を聞いても痛くも痒くもなかった。そして一心に乗馬の稽古と槍の練習を励んだ。打ち太刀も熱心にやった。すべてを近づく合戦に備えて、なにもかも忘れたひたむきな稽古ぶりが、やがて少しずつ家中の人の注目をひきはじめた。「重助に謝ったのは、臆病からではなかったかも知れない」「そうだ、重助と果合いをして、勝つてもしかたがないからな」「謝れないところを謝るといふことは、ほんとうの勇気がなくてはできないものだ」こんどはそういう評がたちはじめた。もちろん、これとしても大六にはどちらでもよい評判で、彼はただ来るべき戦ということをもモクヒョウに、黙って自分の修行をつづけていたのである……。こうして一年の月日が経った。けれど天下は泰平で、合戦のはじまりそうな話はどこにもなかった。それである時、大六は堪りかねたようにそのことを叔父にたずねた。「ああ、あのと時の話か」又十郎は笑いもしないで答えた、「……よろこぶがいい、あれは心配したほどのこともなく無事におさまった、天下は泰平だ、戦などはないから安心するがいい」

「戦などはないのですって」少年はきつと叔父の顔を見た、「……では大六の面目はどうなるのですか、重助づれに土下座をして謝った⑤私の武士道はどうなるのですか」

「どうなるものか、おまえはりっぱに生きて御奉公しているじゃないか、この頃は武芸も

上達したようだし、見たところ体もeソウケンだ、おそらくこれからも生きて御奉公ができるだろう、おまえの武道はちゃんと立っているよ」

「では叔父上は、初めから……」

「初めも終わりもないさ」⑥又十郎は平然とそう云った、「あのと時おまえは、どうしても堪忍ならぬと云った、それが間もなく戦があるぞと聞いただけで、土下座までして果合いをとり消した、⑦つまり『なる堪忍』だったのだ、さむらいには御奉公のほかにならぬ堪忍などというものはないものだ」

大六は唇を噛み、頭を垂れた。

「あのと時、重助と果合いをしてらどうだ」又十郎は少し間をおいて云った、「……相手を斬ればおまえも切腹をしなければならぬ、勝つても負けても、今日おまえは生きてはいられなかったのだ、繰返して云うが、武士には御奉公のほかに捨てるべき命はないものだぞ」

(山本周五郎 『ならぬ堪忍』)

(注) *1物頭 江戸時代の武家の役職で、弓組や鉄砲組の長のこと

*2御馬前 殿様の

の馬の前のこと *3凜然と 勇ましくりりしいさま

問一 二重傍線部 a、e のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「侍の命は、いちど御主君に捧げたものだ」を言い換えた部分を、二十字で本文から抜き出し、最初の三文字と最後の三文字を答えなさい。

問三 傍線部②「それなら、もうお願いしません」とあるが、この時の大六の気持ちを読んだものとして、最も適当なものを次のア～オから一つ選びなさい。

ア 又十郎が賛成してくれないので、果合いはもうあきらめた。

イ 又十郎の了承なしに果合いを決めたことを後悔している。

ウ 又十郎の了承はもらわずに果合いをする決意をいっている。

エ 又十郎の言うことは的を射ていると納得している。

オ 又十郎の説得を、別の人に頼んでみようと思っている。

問四 傍線部③「嘲笑されたのは云うまでもない」とあるが、大六はなぜ嘲笑されたのだろうか。四十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部④「けれども大六は、どんな評を聞いても痛くも痒くもなかった」とあるが、どういうことか。五十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「私の武士道」とあるが、ここで大六が考える「武士道」とはどういうものであるか。次のア～オから一つ選びなさい。

ア 主君が名誉を手にするを何より第一に考え、個人の事情は後回しにする。

イ 思ったことはどんどん人に相談するが、反対されても自分の信念を貫き通す。

ウ 同じ謝るにしても、その方法をよく考え、自分にふさわしい謝り方を選ぶ。

エ 戦で活躍して名誉を得ることを目指して、常日頃から心身の訓練に没頭する。

オ 面目を重んじ、恥をかくくらいならば、潔く決闘を挑むことを選ぶ。

問七 傍線部⑥「又十郎は平然とそう云った」とあるが、この時の又十郎の思いを説明したものとして、最も適当なものを次のア～オから一つ選びなさい。

ア 大六からうそをついていたのかと疑われ、狼狽している。

イ 自分の本心を理解してもらえて、うれしさを感じている。

ウ 主君に仕えるのが第一で、それ以外は重要視していない。

エ 武士のあるべき姿を理解しない大六に対していらだっている。

オ あくまで果合いにこだわる大六に失望し、冷淡にふるまっている。

問八 傍線部⑦「つまり、『なる堪忍』だったのだ」とあるが、どういうことか説明したものとして、最も適当なものを次のア～オから一つ選びなさい。

ア 重助との果合いは、まったく価値のない、くだらないことであるということ。

イ 重助とのいさかいは、耐えがたいものではあったが、それでも我慢できることであつたということ。

ウ 重助とのいさかにより、果合いの約束をしたことは、武士らしいことであつたということ。

エ 果合いをするのも、戦で活躍することも、武士の行動としては同等の価値を持つということ。

オ 武士らしくあるということは、そもそもどうでもよいことであるということ。